

## ★トランプが手にした新兵器でイラン危機は核危機に＝ウィリアム・アーキン

2016年のトランプ米大統領選出の10日前、米国はイランを核攻撃した。出来事は、毎年10月下旬に開催される核戦争演習だった。この戦争ゲームでは、イランが米空母を沈め、米海兵隊に化学兵器を使用した後、中東軍司令官は核攻撃を要求、大統領が考慮する間、それぞれ核爆弾一発を搭載したB-2ステルス爆撃機2機が待機した。

「一連の挑戦的なシナリオで米軍をテストすることにより、戦略的抑止力の安全性、確実性、有効性および準備状況を確認している」と、当時の米戦略司令部司令官だったセシル・D・ヘイニー准将は、演習中に語った。

核兵器の使用を決定するまでの複雑なシナリオの作成を手伝った政府請負業者によると、「グローバル・サンダー17」（この演習は2017会計年度に行われたためにこう呼ばれる）は、「戦闘員司令部による戦術レベルでの攻撃の実行」に焦点をあてた。

英語では、これは中東、欧州または朝鮮半島の3つの「戦域」司令部の1つをサポートするために核兵器を使用することを意味する。当時ニュースを支配していたのは北朝鮮とロシアだったが、この請負業者はイランのシナリオが選ばれたと言う。というのは核兵器と通常軍、ミサイル防衛とサイバー、および宇宙を核戦略家が「21世紀の抑止」と呼ぶものに最大限統合できるからだ。

「米国の抑止力は、核兵器だけではない」と、ヘイニー准将は、グローバル・サンダー17が始まる数日前カンザス州立大学での講演で述べた。「必要であれば」、米国は「我々が選んだ時間と場所と領域で対応する」と彼は言った

イランのシナリオがこれまで公表されたことはない。2016年の戦争ゲームについての戦略司令部の説明は「概念的な機密扱いのシナリオに従った」というだけだ。

米国は過去にイランへの核脅迫を公にまたは明示的に行ったことは一度もないが、核戦争の可能性を高める新しい核兵器を配備した。W76-2と呼ばれる新しい核兵器は、オバマ政権の最後の日に行われたイランのシナリオのタイプに正確に対応することを目的とした「低出力」ミサイル弾頭だ。核戦争計画に直接関

与する軍事筋は、トランプ政権下でもイランに関する戦争計画になんら正式な変更はなかったと述べているが、彼らが言う「より使いやすい」兵器の配備は核の微積分を変える。

4人の軍高官はニューズウィークへの独占報告で、6カ月におよぶイランとの行き詰まりが核戦争に発展する可能性はなさそうだと述べた。しかし新しいトライデントII型ミサイル弾頭の配備は、攻撃の脅しをより信頼できるものにするを明確に意図しているとし、危険を高める変化が少ししか理解されず気付かれてもいないと指摘している。彼らは、(米国が)新しい能力(を持つこと)で、イランは米国や米軍への大規模攻撃を思いとどまるに違いないと主張している。しかし4人とも非常に渋々だが、「ドナルド・トランプ」の要因が関係していることを付け加える。この大統領と新しい兵器には、核の敷居を越える特異な危険を考えさせる何かがあるのだ。

核兵器はイランに対処する軍事緊急事態計画の一部になってきたが、それはジョージ・W・ブッシュ政権の2002年の「核態勢の見直し」に遡る。ホワイトハウスは、9・11のわずか3か月後に、核戦争立案者への指針で、戦略司令部の任務に「悪の枢軸」国家(イラク、イラン、北朝鮮)にシリアとリビアを追加した。

多くの内部討論の後、オバマ大統領は独自の「核態勢の見直し」を著して、通常兵器による大規模攻撃を抑止するか、あるいは敵の生物化学兵器の使用を阻止する「狭い範囲の偶発事象」の際には、米国が非核国にたいしても核兵器を先制使用する可能性のあることを確認した。これはまさに後に「グローバル・サンダー17」演習で展開されたシナリオである。米科学者連盟が入手した部分的に機密解除された文書によると、オバマ政権で書かれた新しい核戦争計画には正式にイランが含まれていた。

連盟のハンス・クリステンセン氏は、これがドナルド・トランプの受け継いだ情勢だったと指摘している。以前の2つの政権で確認された国家政策には、イランに対する核戦争の可能性が含まれているが、イランに対してだけでなく、このようなシナリオでの戦争ゲームを行うなかで、大統領命令を実行する戦略司令部の弱点がさらけ出された。こうして軍の側に先制攻撃のシナリオを満たすため新しい兵器を作成する「必要条件」が浮上した。

クリステンセン氏は先週のインタビューで、「核計画には大統領に関係なく、独

自の生命をもつ傾向がある」といった。というのも核計画立案者は「大統領からの比較的曖昧な指針」を受けて仕事をし、無数の可能なシナリオを予測してシナリオを作り、軍事演習を実施し、計画や武器、軍隊の態勢を調整するからだ。

就任したトランプ大統領の最初の仕事の1つは、米軍「再建」の覚書に署名することだった。その覚書は引退したマティス国防長官にたいし、新しい核態勢の見直しを始めて、核抑止力が「21世紀の脅威を抑止するため確実に整い適切に仕立てられているよう」に指示した。戦略司令部はすでに、北朝鮮やイランのような進んだ新興核保有国に対処するには新たな核兵器が必要であると決定していた。今や彼らは発進命令を受けたのだ。

「彼らは自分のメールに答えた」と、初期のトランプ政権に関与していた退役空軍士官は、国家安全保障指令について語った。核専門家たちの間では、「適切に仕立てられた」とは、爆撃機ではなく弾道ミサイルで運ばれる新しい小型核兵器を意味する。後者の爆撃機は、グローバル・サンダー演習で行われたようにミズーリ州の本拠地からイランまたは北朝鮮に飛行するのに11時間かかる。一方、ミサイルは30分、前方展開の潜水艦発射ミサイルは10～15分しかかからない。

トランプ政権の初年度におきた北朝鮮による一連の長距離ミサイル実験は、米国の核能力にあるこの「穴」を引き立たせたと、核審議に関与した空軍高官は述べている。大量破壊兵器の切迫した使用を伴う最も緊急のシナリオでは、既存のミサイルは弾頭のサイズが大きすぎて「使用できない」と考えられていたため、信頼できる抑止力の脅しにはならないと拒否されたのだ。

核戦争計画の込み入った世界では、トライデント潜水艦から発射された単一の小さな核兵器のみが、新しい脅威に対応するために必要な信頼できる「迅速な」能力とされる。つまり、新しい核兵器は米国あるいはアジアの同盟国への攻撃を、機先を制して阻止するために実際に使用できるのだ。B-2爆撃機は理論上は、核爆弾を積んで前方展開することにより対応時間を短縮できるが、そのような前方展開は試みられたことはなく、同盟国との協議と許可を必要とする。戦争計画者は、爆撃機は前方展開されても早さが十分でなく、任務遂行には時間がかかり、撃墜される可能性がある」と結論付けた。

2018年2月、トランプ政権は独自の核態勢の見直しを終了した。その序文のなかでマティス国防長官は「現実にも目を向け、世界をありのままに見なければならぬ。願望であってはならない」と書いた。

この「見直し」は、海軍のトライデント II 潜水艦発射ミサイルに新しい低出力の弾頭を装備することを正式に呼びかけた。ロシアへの対抗策として打ち出されているが、政府と非政府の当局者たちは今日一致していているのは、新しい W76-2 弾頭は、使用可能で迅速な武器を提供することで隙間を埋めて、北朝鮮やイランからの大量破壊兵器や長距離ミサイルを使った差し迫った攻撃に対抗することをずっと意図していたと一致していている。

2019 年 1 月下旬、ファンファーレはほとんどないまま、これらの低出力の W76-2 核弾頭の第一号が、テキサス州アマリージョにあるエネルギー省の生産ラインを動き始めた。発表がないため背景説明をした関係者によると、最初の W76-2 弾頭は 9 月に海軍に引き渡された。W76-2 の爆発出力は 5~6 キロトンの間であると考えられている。これは広島に投下された原爆の約 3 分の 1 のサイズだ。クリステンセン氏の推定によると、これらの小型弾頭約 50 発がトライデント型潜水艦に配備され、12 隻に搭載された 24 基のミサイルのうち 2 基に搭載される。

「グローバル・サンダー17」演習が終了する前日の 2016 年 10 月 30 日に、ワシントン州に本拠を置くトライデント弾道ミサイル潜水艦 USS ペンシルバニアがグアムのアプラ港に浮上した。弾道ミサイル潜水艦のグアム寄港は 28 年ぶりで、トライデント型潜水艦の海外の寄港としては 9/11 以来、3 回目だった。

「この訪問は、敵の攻撃から生き残り相手に致命的な打撃を与える高度な能力をもって同盟国への揺るぎない拡大抑止を提供し支援する決意のデモンストレーションだ」と、当時のハリス太平洋軍司令官（現駐韓大使）は語った。

USS ペンシルバニアの航海は、その独特で拡大された「戦術的」任務の導入であり、現在ではロシアと中国を超えて原子力潜水艦の任務を拡大している。9 か月後、別の弾道ミサイル潜水艦 USS ケンタッキーが、アラスカのアリューシャン列島にあるダッチハーバーに出現した。北朝鮮の標的からわずか 3,400 マイルのところだ。

トライデント潜水艦は、出航したら海面に浮上することはめったにない。100 日間のサイクルで活動し、水中で約 70 日間、その後 30 日間補給を行って新しい乗組員が引き継ぐ。しかしトランプが大統領になって以来、4 隻のトライデント潜水艦が浮上した。太平洋に 2 隻、大西洋に 2 隻で、両方ともスコットランド

に寄港した。

目に見える核外交を行うために、米軍は 156 機の強力な爆撃機に頼っている。B-2 ステルス爆撃機、由緒ある B-52 爆撃機、さらには通常兵器だけを用いる B-1 爆撃機だ。

昨年 5 月、トランプ政権がイランからの「多くの厄介でエスカレート的な兆候と警告に対応して」軍事配備を加速し始めたとき、爆撃機は目に見える役割を果たした。B-52 爆撃機がペルシャ湾カタールの空軍基地に 2 ヶ月間配備された。また、10 月末には、B-1 爆撃機がサウスダコタ州からサウジアラビアまで飛んだ。同国に重爆撃機が展開したのは 1991 年のデザートストーム作戦以来だった。

しかしその後、爆撃機は中東の空から大方姿を消した。今年の核演習、グローバル・サンダー20 は、完全にロシアのシナリオに焦点を合わせた。2019 年 10 月の演習のシナリオは、1 年以上前に選択されていた。

先週、インド洋のディエゴガルシア島に 6 機の B-52 爆撃機が飛来した。英国支配下の同島に爆撃機が前進配備されるのは 10 年ぶりだ。空軍のホーク・カーライル退役将軍は空軍タイムズ紙に、爆撃機をイランの南端から 3,000 マイル以上離れた場所に配置すると、テヘランの中距離弾道ミサイルの射程から外れると語った。

前方展開されたこれらの爆撃機は核武装しておらず、太平洋、欧州、中東で使用されている 6 カ所の前方爆撃機基地にも核兵器は配備されていない。イランに対する米国の核攻撃があるとすれば、それは新しい低出力のトライデント潜水艦からおこなわれるだろうと消息筋は一致してきている。

空軍や戦略司令部の誰も、核計画に関する記録や、進行中のイラン危機で役割を果たしている核兵器の実際の見通しについて話したがない。高度に機密にされた戦争計画について話すには慎重で大統領の行動スタイルを気にしている。

核兵器の使用という哲学的な問題について、私が話した 6 人の空軍と戦略司令部の情報源はすべて、この大統領の下に核オプションが存在することで、イランへの核使用はないという明確な信念をわかりにくくさせていると懸念を表明した。彼らが一致するのは、米国の核使用は、両国が全面戦争を行った後、イランが化学兵器または生物兵器を使用した後、または米国への直接攻撃の後のみだ

ということだ。

当局者たちが同意するのは、このようなシナリオでは大統領の意思決定は不透明で予測不可能である可能性があるという点だ。7月、トランプが無人偵察ドローンの破壊に対する報復としてイランの防空ターゲットを攻撃するオプションを提供されたとき、彼は150人の民間人が攻撃で死ぬかもしれないと心配して、この非常に限られたオプションさえ拒否した。しかし、大統領は、イランのソレイマニ司令官をバグダッドで殺害した1月2日の無人機攻撃で最も極端な選択肢を選んだ。

引退した空軍将校の1人が今週、筆者に語ったところによると、彼が心配しているのは、イランの最も極端な行動に対応する米国の選択肢の「パッケージ」には、たとえ100分の1つの選択肢であっても、自動的に核オプションが含まれることだ。当局者たちは、「迅速だが付随する被害の少ないW76」を持っていると、使うことができる核兵器だという意識が付随してうまれる。

これが大統領指針に基づいて核戦争計画者たちが作り出したものなのだ。現在の核戦争計画が書かれているように、そのような武器の使用が、ほぼ広島のように、より広く理論的にはより破壊的な全面戦争を未然に防ぐ衝撃的な雷鳴として正当化される可能性がある。

「これは、1年前には米国にはなかった機能です」と、当局者はいう。使用されるように、さらに先制的にさえ使用されるように正確に作成されていると。「そのオプションが決して提供されないことを望むばかりだ」

(ニューズウィーク 1月13日号)

ウィリアム・アーキン＝米国の核兵器問題専門家。